



TITLE:

# 地理教材としての地形圖：七、多摩川中流地方

AUTHOR(S):

---

CITATION:

地理教材としての地形圖：七、多摩川中流地方. 地球 1925, 3(2): 295-296

ISSUE DATE:

1925-02-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182821>

RIGHT:

## 地理教材としての地形圖

### 七、多摩川中流地方

参照すべき地形圖は陸地測量五萬分の一青梅（東京十號）一葉にて足るが八王子、五日市の二葉も用意あらば好都合。多摩川は分つて三とする事が出来る。青梅以西の山中を流るゝ部は上流であり青梅から大凡立川乃至府中に至る間の中流其以東は下流である。中流は山麓にある扇狀地を流るゝ部で流れは急であり流域には水田が甚少い。下流では可なり廣い肥沃なる沖積地を伴ふ。地形圖青梅を開き見れば多摩川中流が全部含まれてゐる。圖の記號を注意すると水田が少いのがすぐ判る。水田の少きに反して桑畑が非常に多いのに氣がつく。多摩川中流に限らず一般に關東平原周圍の山麓地帯は養蠶地である。であるから其中心となるもの關連して機業地となるもの都會が此地帯に發達してゐる。前に申した如

地理教材としての地形圖

く此地方は扇狀地であるが單純なものではない。圖幅の中央に橢圓形の丘陵地が讀まれる。此は狹山とよばれ周圍が極緩傾斜の平たい扇狀地である故に古來人の注意を呼んだ。

五月闇狹山か峰にともす火は

雲の絶間の星かとそみる（顯季）

しからば此丘陵は扇狀地の下から頭を出した古期岩石よりなる山かといふとしからず。實は一代前の扇狀地である。狹山に限らず青梅圖幅に見らるゝ丘陵地は皆一連の先代の扇狀地である。此等の丘陵地の中にある主谷を御覽じ、みな圖の西縁中央部の少し外を中心として放射してゐる狀が明かに讀まれる。青梅の南には三五九米の高地があるが放射谷の外ほど次第に低く所澤の南には八九米となる。此等の谷は地形圖でも少しは讀めるが行つて見れば浸蝕力の衰へた老谷である。特に狹山にて然りである。此等の丘陵を造る地質は主に砂利

である。河成の砂利層である。中には砂や粘土のレンズ形挟みがある。粘土の中には流木が澤山にある。狭山では東京市の水道工事で舟に似た流木も出た。ある學者は古代の獨木舟だと唱へてゐるが地質學から言へば亞炭化した流木で地層の重みで壓縮され扁平になつたものであり物理學から申せば舟として人を乗せると乗つた人が沈むであらうといふ不完全な代物で、ヌビヤ人の浮ウキよりも更に一層原始的な代物である。先代の扇狀地の出来るすぐ前は此あたりまで海であつた。狭山の流木の出た層より八十尺下には半淡水棲の貝類の化石が出たことにより證せらる。其時代は鮮新世の最後か洪積世の始めと思はれる。

先代扇狀地は一般の土地昇降（或は他の原因）により高くなつたに反し川は浸蝕力を強めた。多摩川は堅固な秩父古生層の山地から開放されて青梅以東の舊扇狀地の軟弱なる地層を深く斷り込みながら地球の自轉の影響を受けて北から南へと時計の針の如く移動して來た。

現在も南移の傾向を有しながら西に残つた舊扇狀地を切り崩しつゝある。其爲に過重の川砂利を運搬し中流以下の緩流にて遂に其力を失ひ驚くべき廣き多摩河原をなし東京市に不斷の道路用材料を供給してゐる。狭山は多摩川の時計針の移動に際し切り崩しを偶然のがれたものにすぎぬ。狭山と現在の水流の間には三段の段丘が發達してゐるが地形圖には讀み得ない程度の低きものである。東京市の水道は江戸時代の玉川上水を利用したものと新水道とある。舊水道は羽村より水をひき拜島より東へ流す。新水道は狭山の石川、内堀、宅部の部落のあつた谷を堰し多摩川の水を貯水して旱魃に備へしめたものである。此を村山貯水池と稱し最近出版の小川博士の日本地圖帖に獨り記されてある。（槇山）

後記、一、多摩川右岸の急崖背後には舊扇狀地内の古き谷の回春せる地形がある。

二、新扇狀地上には所澤、立川の二飛行場がある。